

## 若手研究会支部

我が学会には、研究歴は浅いがもっと機動的に島嶼学に関わりたいと思う有志による、若手研究会支部がある。支部長には大西会員、副支部長には前泊会員が就いていて、私も立ち上げの際のメンバーとして名前を連ねさせていた。

ここ最近では活動が滞っていることもあり、この現状を打開し、活動を促進していく意志を高めるべく、有志による島巡検の機会を設けた。場所は、近江八幡市沖島。そのときの雑感を記したい。

## 沖島について

日本で最も大きな湖の琵琶湖には3つの島があり、その中の沖島（おきしま）は、近江八幡市に属し、周囲約6.8km、面積約1.53km<sup>2</sup>、琵琶湖最大の島である。そして、約350人の人が住んでいる日本で唯一、湖沼内にある有人島である。我々の研究対象となる島嶼の中ではめずらしい存在であり、既に、漁業、環境、歴史、文化、民俗等多くの分野で研究がなされていることはご承知のとおりである。また、沖島は2013年7月に、離島振興法の離島振興対策実施地域（離島地域）に指定されており、これに基づき滋賀県は、滋賀県離島振興計画（平成25年から34年）を策定している。よって今後は、さらに多くの学際的研究が進むと予想される。

そこで、我々若手研究会支部有志は、沖島に実際に足を運び、この島の現状を見てみることにした。

## 沖島へ向かう

平成26年4月20日、私と前泊副支部長、そして金子会員の3人は岐阜から車で最寄りの堀切港（近江八幡市）へ向かった。途中、彦根から堀切港へ向かう湖岸道路の右手車窓からは多景島が見え、その奥には対岸の山々…ではなく、どんよりとした雲が広がる。琵琶湖を「淡海」と例えることを実感するが、それ以上に巡検時の天候が心配になった。

堀切港では大西支部長と合流、堀切港12時15分発の沖島通船に乗った。通船は、沖島町内会が運営しており、平日一日11便、休日は9便運行されている。片道約10分、大人500円である。乗客は、我々4人のほかに、島外からの観光と思われる客が数名乗船していた。一昔前は、観光で訪れることのない島、そもそも存在自体知らない人も多い島であったが、最近では琵琶湖汽船の遊覧コースの中にも入っており、気軽に島に上陸できるようになった。



写真：通船「おきしま」

## 沖島小学校

さて、船が沖島港に入るとまず、漁船や遊漁船の多さにびっくりした。訪れた日が休漁日なのだろうか、さすがは琵琶湖の恵みで生業としている島である。



写真：沖島港。就労者の半数以上は漁業に従事していることから、集落の規模と比べて漁船が多い。

島内を、巖島神社の方向へ散策する。しばらくは港湾沿いに家々が続く。その先に学校が見えてくる、近江八幡市立沖島小学校である。民家を挟んで、その前は広場になっていて、小学校のグラウンドと兼ねているのだろうか。立派な校舎の小学校にはプールもあるが、グラウンドは島内の主要道ともなっていて轍もできている。いくら狭い島でも見たことが無く、不思議な感がある。



写真：沖島小学校校舎と校庭

沖島小学校は、小規模特認校に指定されており、

近江八幡市内のどの学区からでも入学することが可能となっている。島内に中学校はない。

## 沖島風景

学校を超えると、道の両脇のちょっとした平地でも自家菜園が盛んに行われており、訪れたときは赤キャベツが大きく実っていた。さらに進み、湖岸沿いの道の終点に巖島神社があり、山の中腹にある社に登ると、対岸の国民休暇村が間近に見える風光明媚な場所であった。参道や鳥居などは綺麗に整備され、島の人々の尽力が垣間見られた。



写真：巖島神社鳥居



写真：集落のはずれにある畑。野菜類の自給が行われている。

沖島の巡検は1時間半ほどで、実は奥津島神社や湖西側の集落などを巡ることはできなかったが、世界的にも稀で、日本で唯一の淡水湖

にある有人島だから発見できたことは様々あった。例えば、港の一角にある立派な艇庫に入っていた消防艇は、他の島々で見るとは滅多に無い。いや、気づくことは無かった。しかし、この島を訪ねたからこそ、消防艇の存在やその有効性に関心が向いた。



写真：消防艇庫。消防艇は救急搬送にも利用されている。

また、訪れた日は丁度、近江八幡市長選挙の投票日で、沖島の集落の中心にあるコミュニティーセンターが投票所となって、誰彼となく人が集まっていた。この光景を見て、「あらゆる選挙において、なぜ島での投票率が高いのか。」という話題になり、都市部や他の島との比較をしたり島自体の風土から分析を行ったりと、短い時間でも有意義な巡検ができたのではないかと思う。



写真：近江八幡沖島郵便局前にて、若手研有志（左から黒崎、前泊、大西）。休日のため貯金はできず。

帰りの船に乗る前、漁港にある売店で「沖島よそのコロッケ」という新たな特産品が気になり、買って食べようかと思ったが、出来上がるのに20分ほどかかるとのこと。島に着いてすぐに発見しておけばよかったと悔やみつつ、沖島を後にすることにした。

### 若手研、今後の課題

堀切港に戻ってからの帰り、今後の若手研究会の活動について話し合う時間を設けた。その中で、

(1)メンバー間の情報交換に使用しているメンバーリストがサービス終了するのに伴い、新たな媒体に移行して更なる情報交換の活性化を図ること。

(2)2015年の年次大会に向けての自主的な巡検会を開催地で行いたい意見があり、これを実施しようとする事。

(3)「島嶼学」について考える機会を研究会でも開催したい意見があり、これを実施しようとする事。

以上3点のことを今後行っていくことを確認し、我々は今回の活動を終えることにした。

(文責：黒崎吉博、写真撮影：金子良徳)